

まちあるきに資する書籍・HP 作成プロジェクト

鳥越けい子

筆者は、青山学院大学への奉職以来今年度に至るまで、職場近くの渋谷円山町、ならびに自宅近くの善福寺池とその周辺地域（杉並区善福寺）という2つの土地をフィールドとしたプロジェクトを継続・展開してきた。両者はいずれもサウンドスケープのコンセプトをベースに、特定の土地の環境文化資源を発掘・蓄積・発信すること、その成果を都市デザイン・まちづくりにも資するHPや書籍等のメディアにまとめることをめざしていた。そのため前者は2016年度以降、後者はその2-3年後から、いずれもその内容をACLのプロジェクトとしても位置づけてきた。

これらの活動は来年度以降も継続・実施する予定であるが、筆者が2023年度末に青学を定年退職することから、今年度はこれらプロジェクトの活動内容をそれぞれ書籍およびWebサイトにまとめることを主な活動内容とした。そのため本報告書では、先ずそれら書籍を紹介すると共に、そこで扱っている双方のプロジェクトの今年度に至るまでの大きな流れを解説する。あわせて、当該の書籍に盛り込むことのできなかった今年度における活動内容を簡単にまとめることにしたい。

1. 渋谷円山町

青学の鳥越研究室に「渋谷青山ミュージアムプロジェクト」を立ち上げた2009年、その重点地域としたのが渋谷百軒店という地区であり、そこに重ねて設定したのが<SCAPEWORKS>というコンセプトだった。

<SCAPEWORKS 百軒店>はその後、フィールドを円山町に拡大していった。そのなかで「アーバンタクティカル（ゲリラ的な小さなイベントづくり）」的活動から、まちの歴史と今を伝えるメディアづくり、まち歩きガイドブックの編集・出版活動へと活動の重点が徐々に移行し、コロナ禍を経て企画・作成したのが『円山町に生きる 料亭三長』（2024年3月15日 料亭三長発行）という書籍である。



「第1部：現存する料亭三長の建物 / 第2部：「三長」の歩みとこれから / 第3部：円山町の成立と今を探る / 第4部：移ろう花街のこれから」という全体構成からも理解されるように、その内容は建築物の実体記録に留まらず、「生きられた建築とまち」のあり方、「人をもてなすまち円山町」の成立と歩み、そのベースとなる時代や社会・経済・芸能・食・等々とそれを支える「場の力」を伝えようとする監修者としての筆者の考え方を貫いたものとなっている。

今後の課題は、本書をこれからの渋谷のまちづくりに活かす道を探ることである。そのため現在、本書を活用した料亭三長および円山町の見学会等の活動プログラムの企画検討を始めつつある。

2. 善福寺池とその周辺地域

サウンドスケープという考え方は、私たちに人間としての原点に立ち戻る力、現代社会に引かれた各種の境界線を超え感性と意欲を与えてくれる。そのことを確認するため、筆者が2010年以降、杉並区北西部に位置する故郷の池の畔とその周辺地域をフィールドとして展開しているのが<池の畔の遊歩音楽会>というプロジェクトである。

2019年までのプロジェクトの正式タイトルは<池の畔の遊歩音楽会：音のすむ森に捧ぐ！>で、「トロールの森」開催中の特定の1日、指定した時刻と地点に集まった人々が、ナビゲーター役の筆者と「放浪の楽師」役の歌手・辻康介が、参加者と一緒に池の畔を歩きながら行う音楽会として展開した。「音風景のナビゲーター」と「時空を超えた放浪の楽師」との掛け合いを基本に展開する<池の畔の遊歩音楽会>は2016年までの7年間、徐々にそのチームメンバーを増やしつつ展開・成長していったが、2017年からはハイアートから芸能への創造的回帰、歩行から修行・奉納への展開をテーマに、その形態の一部を変えた。また、コロナ禍中の2年間には<池の畔の遊歩音楽会 跡地巡礼>というインスタレーション的形態を取り、2022年からは再び方向を中心としたパフォーマンスに戻りながらも、その開催時間を「黄昏から夜」へと移行したところである。

このプロジェクトの企画趣旨にはさまざまなものがあるが、それは最終的に筆者にとって、故郷の池とその周辺の土地に改めて向き合い、土地との対話をさまざまな意味で深めることだった。つまり、自分自身がこれまで故郷の土地とのつきあいのなかで漠然と感じていたこと、大切に思っていたこと、疑問に思っていたこと等をより明

確な意識のもとで展開していくこと、さらにそれを長年継続して展開していくことが、この土地に対する自分の感受性を深めると共に拡大し、そこにさまざまな立場の参加者たちを巻き込んでいくことになった。

2023 年度は、このプロジェクトの背景にある問題意識と具体的な活動内容を、特にその最初の 10 年間を中心に『触発するサウンドスケープ<聴くこと>からはじまる文化の再生』（2024 年 2 月 27 日、岩波書店発行）という書籍にまとめた。その帯に「見慣れた風景を音から揺さぶる」と記された本書の内容は、ACL プロジェクトとしての目標「対象フィールドの環境文化資源を発掘・蓄積・発信」を超えたものになっているが、その目標については十分達成したとすることができる。



本年度、この本づくりに加えて 11 月 19 日 16:00 から 18:00 にかけて実施したが<池の畔の遊歩音楽会 TASOGARE の向こうへ vol.2> <https://www.otonoba-soundscape.com/ikenohotori/>である。そのルートは、出発点を井草八幡宮大鳥居から参道と境内を経て、八幡西橋から善福寺川沿いに進み、美濃山橋から下池北岸を通り、近年親水施設として整備された遅野井川の畔で解散する（以下の地図上＊を辿

る) というもので、来年度はその第3回を実施する予定である。



おわりに、長年にわたりこれら2つのプロジェクトをご支援いただいたACLに、深い謝意を捧げます。